

沖縄の伝統的ウミヘビ漁の復活と継承の物語

沖縄には、伝統的なウミヘビ漁がある。ウミヘビは捕獲されると燻製にされ、保存される。かつて琉球王国が存在した時には、中国からの冊封使(使者)を迎えるときに出来る特別な料理の食材としても使われた。このウミヘビ漁、燻製作りの中心となってきたのは、沖縄本島の東にある久高島である。

本映画は、そのウミヘビ漁、加工が実際にどのようなおこなわれてきたかを知る貴重な映像記録である。ウミヘビの沖縄での呼び名はイラブー。王府時代からの長い伝統を持つが、1990年代には担い手が不足し、中断を余儀なくされた。その時期に、島外からイラブーを捕獲しようとする人たちもあらわれ、島の伝統漁は完全に消滅しようとしていた。しかし、一部の島民の努力により、伝統漁は復活した。島外の捕獲業者に対しては、伝統漁を保護する地先漁業権を主張し、伝統漁と燻製の技術を古老たちから学び直し、今では若い世代にもイラブーに関わる人たちがあらわれるようになった。

この復活と継承を可能にした背景には、島の基本を支える信仰の力があつた。イラブーは、単なる食材ではなく、久高の人たちにとっては、神様が久高島に与えてくれる贈り物であり、それを受け取りたい。これは、島の豊饒や繁栄にはかせないものであるという信仰があつた。

映画の成り立ち

東京シネマ新社は、1978年におこなわれた久高島の祭祀「イザイホー」に際して、現地に2ヶ月近く滞在して記録撮影をおこなった。この時、同時に久高島のイラブー漁・燻製作りの撮影もおこなわれた。イザイホーの祭祀は1978年が最後となり、詳細な映像記録は歴史的に高い価値を持つことになり、オリジナルのフィルムは2021年に高精細なデジタル化がおこなわれ、イラブー漁・燻製作りの映像もデジタル化された。本映画は、それを元に、約半世紀後の2023年に新たな撮影をおこなうことで、この間に信仰や技術がどのように伝承されてきたかを明らかにしている。



入場無料

申込不要

2K-Fullスクリーンによる16mm画像/1978年秋 トウンチグワーにおけるイラブー燻製作業 熟練した技の益前/谷口常也撮影

白老の手仕事展
同時開催

沖縄久高島の イラブー

[2024年版]

上映時間:102分

企画・製作・著作:文化財映像研究会/東京シネマ新社 岡田一男、石村智、三島まき

助成:公益財団法人全国税理士共栄会文化財団、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁文化芸術振興費補助金、映画創造活動支援事業

支援:READYFORクラウドファンディング

ナレーター:草野仁

監督:岡田一男、鈴木由紀 撮影:谷口常也・草間道則

公開:沖縄、東京、横浜、京都、大阪などで次々と劇場公開中。

2024年10月14日(月)祝 13:30~15:15(会場) しろおい創造空間「蔵」

◎トークイベント(上映後) 15:25~16:00 同会場にて

伝統漁の復活は、社会的状況に違いはありますが、アイヌ民族の抱える問題と通じるものがあります。また、イラブーに対する信仰は、自然の恵みに対するアイヌの信仰とも共通するものがあります。海に囲まれた沖縄では、海上から島に自らやってくるものをユイムン(寄り物)と呼んで、神々の贈り物、豊饒をもたらす縁起のよいものと考えてきましたが、イラブーはまさにそのユイムンにあたります。こうしたいくつかの観点から、アイヌ文化と久高島の文化の比較を語っていただきます。



野本 正博

民族共生象徴空間「ウポポイ」
運営本部・副本部長

1963年、北海道白老町生まれ。1983年頃よりポロコタンで働き、チセ建築や儀礼、舞踊等の伝承活動に従事。後に国内外で開催のアイヌ文化展の企画・制作。1999年スミソニアン国立自然史博物館特別展「AINU Spirit of Northern People」の共同制作。同展で制作した舟の模型は現在も常設展「北太平洋諸民族文化交流史」の一角に展示されている。近年は博物館・美術館における文化表象をテーマに活動。2012年から2018年3月までアイヌ民族博物館館長。2018年より民族共生象徴空間「ウポポイ」運営本部・副本部長兼文化振興部長を務めている。



岡田 一男

株式会社東京シネマ新社
代表取締役

1942年、東京生まれ。60年代、モスクワの全ソ国立映画大学劇映画監督科にて、ミハイル・ロム監督に師事。70年代、下中記念財団の国際学術映像収集運動、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカの日本導入に参画、西独の科学的ドキュメンテーションフィルム制作を学ぶ。その後、教育・科学・文化にわたる幅広い生物誌・民族誌映像制作と国際的映像収集に関わっている。沖縄国際海洋博、3面マルチ作品の構成を行ない、沖縄関係では、民俗誌映像「沖縄久高島のイザイホー」、「石垣島川平のマングナシ」などの作品がある。国立アイヌ民族博物館の映像検討委員の一人であり、八田三郎の『白老コタン・アイヌの生活』(1925-26年撮影)の復元作業をおこなうなど、白老とも縁が深い。